

沖澤と隠岐

ふるさとへの前奏曲

— 中 — 転換点



青い海と
森の
音楽祭

今からじゃ到底間に合いっこない」。上田はあえて厳しい言葉を投げかけた。「分かっています」。沖澤は落ち着いていた。「合格するかどうかわからないけれど、やってみよう」

「先生、私、芸大の指揮科に行きます」

青森東高校の一室。3年生への進級を間近に控えた沖澤のどかが、担任の上田千枝子に「宣言」した。「え？」。上田は腰を抜かした。日本語教師を目指し第1志望は筑波大学。模試の結果は常にA判定。上田は言葉に窮した。

「指揮科ってめちゃくちゃ難関よ。しかも実技もある。」

控えめな生徒だった。象徴的なエピソードがある。英語の自由作文の授業でのことだ。完成しても沖澤は自ら手を挙げず、上田が見回っている最中に「先生、これでもいいですか」と、こっそり声をかけてくる。いわゆる定型の答えではなく、自分なりの思いを英語でしっかり伝えていた。「彼女の成績からすれば東大も難なく合格していたでしょう」と上田は語る。

「宣言」の背景には、高校

海外経験 芽吹いた情熱

2年の冬に参加したオーストラリアでの短期語学留学があった。「音楽の道には進まない」。親の負担を考えて、自分の気持ちにふたをしていたところがあった。だがシドニーの照りつけるような日差しを浴びるうち、気持ちに変化



語学研修の全日程を終え、修了証を手にする沖澤さん。2005年1月、オーストラリアのシドニー（沖澤さんの知人の袴田大輔さん提供）

が生まれる。「自分の本当に好きなことをやろう」。決心が固まった。実技も才能でこなし、合格者わずか2人という狭き門を突破した。

隠岐彩夏もまた、進路への逡巡があった。

幼稚園から続けるピアノを生かし音楽教師になろうかなというぼんやりした思いを抱きながら岩手大学教育学部に入學。同学部の教授陣の中には、バッハをはじめとする宗教音楽専門の音楽家として著名な佐々木正利がいた。

学部内では1カ月後に控えめなドイツ・ローテンブルクへの演奏旅行のため、佐々木の指揮の下、先輩たちが練習に励んでいた。「新人生も歓迎だよ」と隠岐も誘いを受けた。声は満足に出不せないし、ドイツ語も使いこなせない。旅費だって安くない。でも心が激しく動いた。「この機会を逃しちゃいけない」

ローテンブルクでは、教会や老人ホームを訪れ、ドイツ語でベートーベンの交響曲第9番やモーツァルトのミサ曲を歌った。全てにおいて拙いことは分かっていた。だがそれ以上に、目の前の観客に歌が届いているという喜びの方が勝った。「音楽の原点に出合ってしまったという衝撃が走りました」

その後は半世紀近く活動実績を持つ市民合唱団「盛岡バッハ・カンタータ・フェライン」の一員として、ライブツィヒなどで演奏会を行った。五所川原出身の隠岐は高校時代、ねぶた師を目指すか真剣に悩んだ時期があった。中学生のころ立佞武多が復活し、心が浮き立った。ローテンブルクでの経験は、初めて立佞武多を見上げた時の気持ちと重なるという。「祭りの高揚感や、人々の情熱。音楽に対する憧れとつながるものがあるんです」

沖澤と隠岐、自らを信じる意志の強さが海外経験を通じて才能を芽吹かせた。

（文中敬称略）



大学入学後まもなく、演奏旅行でドイツのローテンブルクを訪れた隠岐さん。2003年5月